

Newsletter



March

花粉症特集

スギ・ヒノキに代表される花粉アレルギーに対する当診療所での治療法について簡単にまとめてみました。

花粉症

アレルギー性鼻炎とアレルギー性結膜炎

花粉症の治療には、花粉の飛散する間だけお薬や注射で症状を抑える対症療法と、アレルギーを起こしづらい体質にする根本療法があります。

TOPICS

…埼玉では約2人に1人が花粉症

…秋にもスギ花粉は飛散します

…春のハンノキ花粉症が増加中



花粉症の対症療法

花粉による鼻炎、結膜炎などの症状を和らげるためのお薬を内服、外用、または注射で使用します。花粉による刺激で放出される「ヒスタミン」などの物質が鼻炎・結膜炎・皮膚炎などを引き起こすので、主にこれらの物質の作用をおさえるお薬となります。

内服薬には以下の種類のものがあり、これらを単独または併せて内服します。

A. 抗アレルギー薬

いわゆる抗ヒスタミン作用のあるものを中心とした、ねむけ以外の副作用のほとんどないお薬です。

- 1) ヒスタミンの受容体に作用するもの：右の写真の各種
- 2) ヒスタミンの放出を抑制するもの：ペミラストン・インタール・リザベンなど
- 3) ロイコトリエン受容体に作用するもの：シングレア・オノンなど
- 4) Th2サイトカインという物質を阻害するもの：IPD
- 5) PG-D2, TX-A2という物質の受容体に作用するもの：バイナス

B. ステロイド薬

いわゆる副腎皮質ステロイドで、効果は抜群です。ただし生理不順や肥満、胃潰瘍を起こすなどの副作用も認められ、長期に連用すべきではありません。症状がひどく使わずにはいられない場合のみ、頓服もしくは短期で使用すべきです。

代表的薬剤：プレドニン・プレドニゾロン・リンデロンなど

C. 抗アレルギー薬とステロイド薬の合剤

上記の二つの成分を含むものです。

代表的薬剤：セレスタミン

D. その他の抗アレルギー薬：ネオファージェンC・アタラックスPなど

E. 漢方薬：小青竜湯など

外用薬としては以下の点眼薬と点鼻薬を用います

点眼薬

- 1) 抗ヒスタミン薬： リボスチン点眼液・バタノール点眼液など
- 2) ヒスタミン放出抑制： リザベン・ペミラストン・インタール点眼液など
- 3) ステロイドを含むもの： フルメトロン点眼液・プレドニン眼軟膏など

点鼻薬

- 1) 抗ヒスタミン薬： ザジテン点鼻液・リボスチン点鼻薬など
- 2) ヒスタミン放出抑制： インタール点鼻液など
- 3) ステロイドを含むもの： アルデシンAQ・ナゾネックス・フルナーゼなど

製品名	製剤写真	用法
クラリチン®		1日1回
アレジオン®		1日1回
エバステル®		1日1回
ジルテック®		1日1回
ザイザル®		1日1回
タリオン®		1日2回
アレグラ®		1日2回
アレロック®		1日2回
ザジテン®		1日2回
アゼブチン®		1日2回
セルテクト®		1日2回
ゼスラン®		1日2回
ニボラジン®		1日2回

花粉症の治療に用いる注射薬

花粉症の治療に使われる注射薬としては以下のようなものがあります

・徐放性ステロイド注射

ケナコルト

一度の筋肉注射で約一ヶ月、ほとんど症状が消失します。

症状の激しい方は御相談ください。

ただしステロイド注射ですので1シーズンに2度までの使用にとどめるべきですし、生理不順・胃潰瘍などの副作用を引き起こす可能性があります。

・ステロイド注射

デカドロン

花粉症が原因で喘息発作などの激しい症状を起こしたときに、静脈注射により速やかに症状を鎮めます。

・非特異的免疫療法

ヒスタグロビンなど

花粉症のシーズン前、あるいはシーズンの始めに数回注射することで、アレルギー症状の緩和が期待できます。

・その他の抗アレルギー薬の注射

ネオファージェン・アタラックスPなど

一時的な症状改善のために使用することがあります。

花粉症の根本療法

花粉症などのアレルギー体質を改善する治療法です

いわゆるアレルギー体質を改善して、花粉症・喘息・アトピー性皮膚炎などを根本的に起こしにくくする注射療法です。一度効果が上がれば、その後は毎年1-2回追加接種するだけで、体質的にアレルギーを起こしにくくなります。ただし、どなたにも有効というわけではなく、顕著な効果が上がるのは10人に1-2人です。効果のない場合は一般的な対症療法以外に方法がありません。

・特異的減感作(免疫療法)

たとえばスギ花粉症の場合、スギ花粉エキスの皮下注射を繰り返すことによりIg-Gを誘導し、花粉に対する抵抗性を獲得する、というものです。

有効性・コスト・治療期間などが疑問視され、現在ではほとんど施行されなくなりました。当診療所でも現在は施行していません。

・非特異的免疫療法

1クール6-8回ほどの皮下注射でアレルギー体質を全般的に改善する方法です。花粉症のシーズン前、あるいはシーズンの始めに数回注射することで、アレルギー症状の緩和が期待できます。現在でも一般的に施行されています。

アレルギーの検査について

アレルギー検査のご案内です

採血によるアレルギー検査

多種多様な抗原に対するアレルギー検査が可能です。花粉症の場合、その時期性により概ねの抗原(スギ・ヒノキ・ブタクサなど)が推定可能ですが、何のアレルギーなのかを正確に知りたい方や、喘息・アトピー性皮膚炎などの症状を併せ持つ方にお勧めしています。保険診療にて検査が可能です。

花粉症の合併症

花粉は鼻炎や結膜炎だけでなく、喘息発作なども引き起こします。以下の症状のある方は御相談ください。

- ・急性副鼻腔炎(蓄膿症)： 鼻炎症状の悪化に伴い、額・頬の痛みや頭痛を伴います。
- ・滲出性中耳炎： 特に小児に多く、耳の痛みや耳閉感を伴います。
- ・気管支ぜんそく： 花粉の飛散が激しい時期には、咳や喘鳴などの喘息症状を伴う場合があります。
- ・アトピー性皮膚炎： 顔のゴワゴワ感や全身の皮膚の乾燥・かゆみなどを伴います。

